

優 秀 賞

「 『じゃんがら』 が繋ぐ故郷と私 」

公共学科 3 年 佐藤 碧

5歳の夏、親戚の新盆で初めて「じゃんがら念仏踊り」を見た。夕暮れの中、白装束の若者たちが太鼓と鉦を打ち鳴らしながら、軒先で故人を送るように舞っていた。高く響く鉦の音と、地面に染み入るような太鼓の重低音が交じり合い、胸の奥にまっすぐ届く。私はその音の波に包まれ、思わず立ち尽くして見入っていた。

じゃんがら念仏踊りは、福島県いわき市に伝わる伝統芸能で、新盆を迎えた家々の前で、太鼓と鉦に合わせて念仏を唱えながら踊り、亡き人の霊を慰める供養の踊りである。江戸時代から続き、地元では「じゃんがら」と親しみを込めて呼ばれ、今も地域の手で大切に守られている。

中学生になると、私は地元の保存会で稽古に通い始めた。最初は太鼓のリズムや踊りの所作を覚えるのに必死だったが、回数を重ねるごとに、動きの背後にある祈りの感覚が少しずつ身体に染み込んでいった。やがて子どもたちに指導を任されるようになり、受け継ぐという行為の意味と責任を実感した。

中学卒業後、私は地元の高専に進学した。経営学を専門的に学び、勉学に励む日々だったが、どんなに忙しくても、盆の時期には必ず地元に戻った。毎年、じゃんがらの行列に加わり、太鼓を叩くことで、自分が地域とつながっていることを実感できた。太鼓を叩き終えた後、汗をぬぐいながら招かれる各家庭の縁側で、おにぎりや漬物を囲む時間が、何よりのご褒美だ。震災を乗り越えてきた地域の人々とともに、踊りながら過ごす時間は、私の背筋を自然と伸ばしてくれる。

そして今年4月、私は高専からこの大学に編入した。環境が大きく変わり、新しい日々戸惑うこともあるが、ふとした瞬間に、太鼓と鉦の音が心の中に響く。迷ったとき、不安になったとき、そのリズムが静かに語りかけてくれる。「大切なものは、静かに、確かに、受け継がれていく」と。伝統を守るとは、自分の根を見失わずに生きること。この音は、これからも私の歩みを導く。